

令和5年度 広島県ニホンジカ林業被害実態調査結果報告概要版

本県ではニホンジカの増加と分布拡大に伴って、人工林への被害が生じています。スギ・ヒノキ等の主伐・再造林を推進するため、林業被害の実態把握と効果的な被害防除対策の検討を目的に本アンケートを実施しました。調査結果をもとに、今後被害軽減に必要な対策等を検討していきます。※本アンケートは、5か年以内に植栽を行った施業地を対象としています。

令和5年度の調査結果の一部を紹介します

■アンケートの実施状況

839 施業地を対象にし、828 施業地より回答を得ました（回答率 98.7%）。

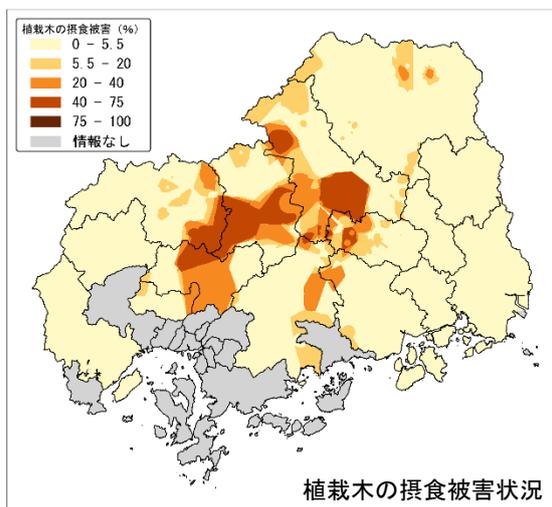
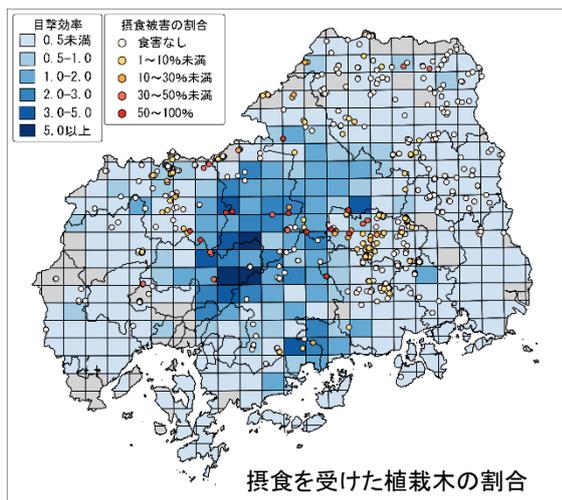
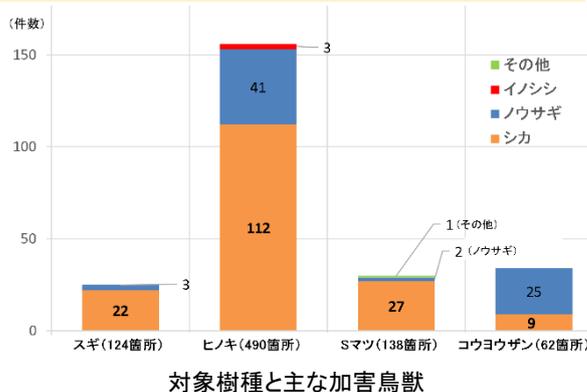
■対象樹種と主な加害鳥獣

右の表のとおり、全体の 30%が鳥獣被害を受けているとの結果で、詳しく見るとヒノキの施業地での被害が最も多く、被害地の 72%は「シカ」による被害でした。主な樹種毎の被害率をみると、高いものからコウヨウザン 55%（34 箇所）、ヒノキ 32%（156 箇所）、スーパーマツ 22%（30 箇所）、スギが 20%（25 箇所）となりました。

なお、植えている樹種に地理的な偏りがあり、それに関連したシカの分布状況にも違いがあるため、この結果は一概に樹種による被害の受けやすさの違いを示しているものではありません。

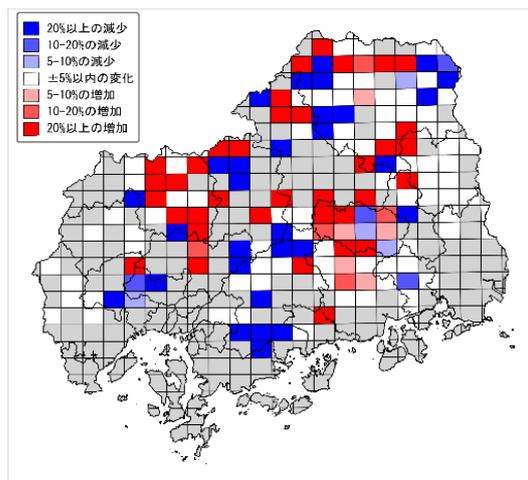
■被害の状況

被害が大きい施業地はシカの目撃効率（※狩猟者 1 人が 1 日に目撃する頭数）が高い県央部に多くあります。こうした、シカが多い地域では特に徹底した対策が必要です。



■被害割合の経年変化率（5年間）

過年度の調査結果を活用し、令和元年度から令和5年度にかけての「摂食被害を受けた植栽木の割合」の経年変化を右図に示しました。県の全体で被害程度が増加していた一方で、県央部と北東部では減少傾向がみられました。



被害を防ぐために必要な取組

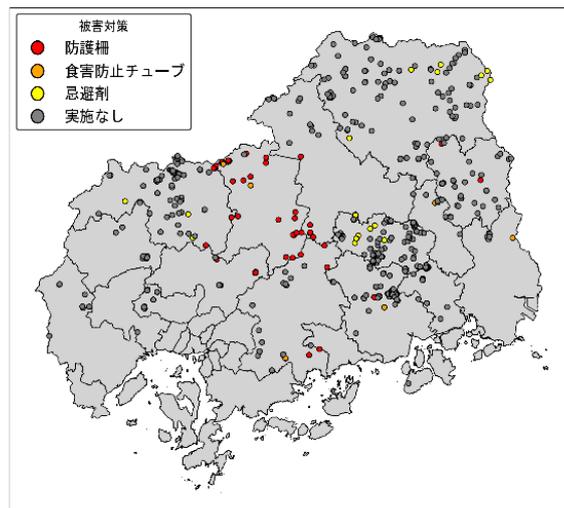
令和5年度の調査結果をもとに被害を減らすために有効と考えられる対策を紹介します。

■対策の実施状況

主な対策は、防護柵、忌避剤散布、食害防止チューブと
なりますが、県内の86%の施業地では対策が実施されて
いませんでした。対策として最も多いのは防護柵で、
対策を実施している施業地はシカ密度が高い県中部に
多くあります。

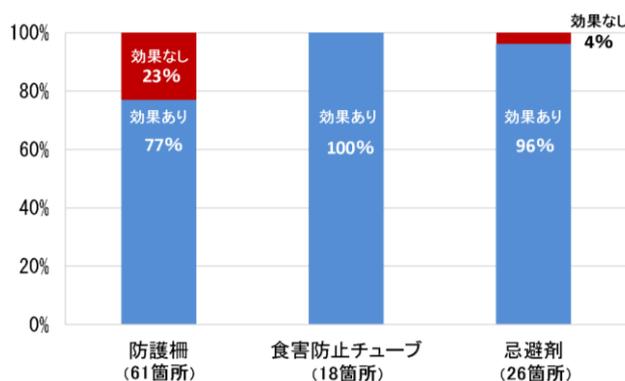


対策の実施状況
(対策について回答のあった753施業地を対象)



■対策の効果

実施した対策のうち、防護柵では被害を防ぐ効果が実
感されていない施業地がありました。効果なしの理由
として回答があったものとしては、「倒木や災害等によ
る破損個所からの侵入」が最も多く、他「シカが防護柵
に引っかかったあとに違うシカが侵入する」というケ
ースもありました。防護柵は、シカの侵入を防ぐ有効
な対策ですが、効果の発揮には適切な対策と維持管理
が必要です。



ニホンジカ林業被害防止技術マニュアル

広島県では、シカの被害から植栽木を守るうえで重要な対策である捕獲技術に焦点を当てた「ニホンジカ林業被害防止技術マニュアル」を作成しています。

捕獲については、これまで被害を軽減させるための捕獲技術が十分に検証等されていなかったことから、広島県では令和2～4年度の3年間で、「捕獲技術の確立」、「捕獲人材の育成」、「捕獲体制の構築」を目的に、モデル地区を設定し、実証事業を行い、技術的な知見を蓄積しました。

その結果、施業地に出没した個体を水際で迎撃する捕獲「水際捕獲」が有効であることが明らかになりました。

被害のある市町で活動する林業事業者等に対して、捕獲技術の研修会を実施することによりこのマニュアルを活用していきます。

マニュアルはこちらからご覧になれます。

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/86/deer-forestry.html>

